
シニガミアルマ

ギャラン☆do

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シニガミアルマ

【Nコード】

N4540L

【作者名】

ギャラン☆do

【あらすじ】

『魔法』という名の奇跡が存在し、魔物が蠢き、自然に溢れ、そして、戦争終結直後で疲弊しきった世界――。

世界に名を連ねる三大国の内の一つが統治する『レレヴィア大陸』。

その大陸にある辺境の田舎にある村で細々と暮らしていた青年リムーブ・ロアノークのところに、一人のぼろぼろな少女が舞い込ん

できた。

少女は名をアルマと名乗ったが、それ以外のことはすべて忘れていて——いわゆる記憶喪失だった。

そんな少女を村は受け入れ、リムーブも、不思議な同居人とともに、今まで通りの平穏な生活を続けていこうとした——。

そんなある日、大規模な山賊の集団が村に押し寄せた。

野蛮な山賊たちを前に逃げ惑う人々。

かろうじてリムーブの手によって撃退したものの、彼らの目的は略奪ではなく——アルマだったのだ。

プロローグ 逃げる囚人服

とある森の中 夜

少女は走っていた。

ただがむしやらに、何の宛もなく。木の枝に体中引つかかれることもお構いなしに、夜の森の中をただひたすら走った。着るその囚人のような着衣はもちろん体中、すでにぼろぼろだ。

「どこだ、追えーっ！」

「まだ近くにいますはずだ！」

聞こえてくる、荒々しい男の声。それも大勢。

振り返れば、遠目でも松明の炎がざっと二十はあることが確認できる。

「――ハア……ハア……」

少女は逃げていた。自分を狙ってくる、あいつらから。

理由は知らないしわからない。本当に、気づいたときには大勢の男たちに少女は追われていたのだ。

――なんなんだろう、まったく。

――目が覚めた途端、追われてるだなんて。何のたちの悪い冗談だ。

見に覚えのない恨みでも買ったのだろうかとか、少女は考えをめぐらせてみたが――やはり心当たりがない。否、思い出せないのだ。

「……ハア……んっ」

一体どれほど逃げ続けていたのか、少女の体力は、もう限界だった。疲労困憊といった様子だ。その端正な顔が苦痛で歪む。

「！……あれは」

その時、少女はあるものを見つけた。――井戸だ。

その井戸は普段人に使われているものだろう、周りはきれいに切り開かれていて、一つの大きな空間と化している。この空間の奥のほうに、どこかへ続く道がある。多分この先に村か何かあるのかもしれない。そこまで行けばもう逃げ切ったも同然なのだが、しかし、少女にそこまで行く気力も体力も残ってはいなかった。

——捕まるわけにはいかない。

——捕まって、たまるかもんか——。

だが、確実に追っ手は迫ってきている。身を隠すにしても、ただ隠れるだけではすぐに見つかってしまうだろう。

それに、緊張状態が続いたせい、もう足が思うように動かなかった。まずい、と少女の中で焦りが生まれ始めた。この際、追っ手達を倒してしまおうという案も浮かんだが、今の状態ではどうにも無理そうだ。

しかし。

次の瞬間、ある妙案が思い浮かんだ。

——これなら、いけるかも……。

些か——というかかなり無茶で無謀で無鉄砲な案だったが、しかし少女の決意は揺るがない。

——逃げ切るには、コレしかない！

意を決しように、少女の顔が引き締まる。

その瞬間、少女は迷わず井戸の中へ飛び込んだ。

第一章 平穏なんてまるで（前書き）

第一章 平穩なんてまるで

とある辺境の田舎の村

——早朝

「リムーブさん、リムーブさん！起きて下さい、朝ですよー！」

六畳一間の小さな部屋に、ドンドンと扉をたたく音とともに幼げな少女の声が響く。

その部屋の主である青年はその声で目を覚ましたが、布団から出ようもしない。

「どうしたんですかリムーブさん、死んでるんですか？それとも、今部屋に女の人とか連れ込んでとっても気まずい状況だったり……きゃー！」

まだ寝ぼけているというのに、まるで小さい子が友達の恋愛事情を引っ掻き回してからかってるようなテンションで、まくし立ててくる。

——……一体俺を何だと思っているんだ？

扉の向こうの良く知る少女に文句を言っただけでやりたくなり、とうとう青年は布団から起き上がった。

起き上がった青年はすらりとした長身で、女以上に艶々とした黒髪、眉目秀麗といった言葉が良く似合う、そんな男だった。

「待って。今開けるー」

年齢にそぐわない、まるで亀のような足取りで扉まで向かうと、まずは扉の鍵を開ける。こんなみみっちい部屋でも、一応鍵は付い

ていた。

カチャリ。

青年が、鍵を開けた。

その瞬間――

「――ぐあっ！」

不意を突くように開かれる扉。結果、青年は壁に挟み込まれるような形で激突した。

「あれれ、何しているんですかリムーブさん。こんな朝っぱらから」

もう完全に狙い済ましてやったとは思えない台詞を言いながら、扉の向こうから少女が現れた。

長い髪の毛を左右に二つ結いにし、可愛いワンピースを着た、まだ幼さが残る少女だった。

「……お前、明らかに狙ってただろ！」

思い切りぶつけた鼻を押さえながら、青年は怒鳴った。

「扉の前でボケーっと突っ立ってる貴方が悪いのです」

そう言うと、少女は何も悪びれることもなく、ずかずかと部屋に入り込んできた。

青年が毎晩寝泊りしているこの部屋――正確に言えば、この村に一軒しかない宿屋の所有する使われていない小屋の一つなのだが、内装は非常に質素である。あるものといえば、先ほど青年が寝ていた布団、年季のはいったちやぶ台、こじんまりとした、これまた古びた机、あとは壁に立てかけてある一本の剣だけだ。

およそ人が住むには少々不便なこの小屋に、青年――リムーブ・ノアロークは日々暮らしていた。

#####

「ほら、ちゃんと朝飯持ってきたんですから、そんなにかりかりしないで下さい」

言いつつ、少女は持っていた紙袋を前に出す。

この少女――アリス・ラインフィールドは、先述した通り、この村に一軒しかない宿屋の一人娘だ。

背がリムーブの胸元あたりの、少し小さめの女の子で、いつも母親――つまりは宿屋の女将さんが毎日毎日セッティングしてくれているというその髪型が特徴的である。

その性格は活発と言うよりお転婆と言った方がいい。言葉遣いは丁寧なのだが、どうもその言葉の本身は失礼極まりない。

慇懃無礼、という言葉がぴったりだ。

そんな彼女だが、こうやって毎朝リムーブに朝食を持ってきてくれるのが日課となっている。しかしその厚意はアリスのものではなく、彼女の母のものである。

「はっは、便利な小間使いだなー、アリスは」

「小間使い？ いえいえリムーブさん。私はそんなものでなく、むしろ毎朝早起きしてペットに餌をあげている偉い女の子、だと思うのですが」

「……相手を貶めると同時に自分を褒めるなんて、恐ろしいやつだよお前」

こんな口の減らない彼女も今年で15になるのだが、落ち着く様子は一向に見られない。アリスの両親も苦心しているらしいのだが――今のところ改善された様子はない。

「てゆーか感謝してください。『毎朝美少女が起こしに来る。さらには朝食まで用意してくれる』という素敵極まりないイベントを起こしてあげてる私に」

手前のことを美少女と言うのはともかく、朝食についてはアリスじゃなく女将さんが用意してくれたものだ。それをまるで自分の手柄みたい……。

そんな思いを噛み潰したリムーブの横で、アリスは向かい合うようにちゃぶ台の前に座り、持ってきた紙袋から朝食を次々と広げていく。

だが。

紙袋から出てくるのは、焼きたてのパン。焼きたてのパン。焼きたてのパン。焼きたてのパン。焼きたてのパン。焼きたての……。

「何でパンばっかなんだよ！」

耐え切れなかったリムーブは身を乗り出してつつこんだ。いつもはもっとレパートリーがあるのに。

「ああ、私が食べちゃいました。てへ☆」

と可愛らしく小首をかしげるアリス。

「てへ☆じゃねえよ、何で食っちゃうのよ!？」

「いやだってお腹すいてましたし……」

「返せ! 俺の朝食を返してくれ!」

なかなか切実な懇願だった。

「むう。この時代、食べられるだけでもありがたいんですよ?」

そう言われて、リムーブはうっとなった。癪だが、確かに彼女の言っていることは正しい。

世界全体を巻き込んだ大戦が終結してからまだ2年。世界のあちこちに戦いの傷跡はまだ残ったままで、貧困にあえぐ人々も多く、国の支給がまだ行き届いていないのが現状なのだ。

大きい都市ならともかく、支援が受けれない町などに住む人々は食糧難に陥っている。

この村も、例外ではない。

なので、渋々パンに口をつけた。

文句を言っていたが、やはり焼きたては美味かった。

「ふふーん。リムーブさん、何か言うことは?」

「ふあいふあい。ふおーふおふあいふあほうふおふあいまふ」

「食べながら言われてもうれしくありません! 何を言ってるのかわからないのでもう一回、今度は丁寧に言ってください!」

「んー、今日も小ぢんまりとしてて可愛い胸だね。どうもありがとう」

「なっ!? せ、セクハラです! リムーブさんは女の敵です!」

「はっはー」

笑いながら、リムーブは早くも二個目のパンに手をつけている。

その横で、アリスはリムーブをジロリと睨みながら、

「いつかナイスバデーになって、リムーブさんを見返して差し上げます」

と、怨念のこもった声をぼそりと呟いた。自分の胸が、年齢のわりに小さいことは多少自覚しているアリスだったが、目の前にいるこんなだらけた男に言われては、さすがにむかつ腹が立つ。

「その前にまず、そのくそ生意気な態度を直さないとなー」

「うっ、それは……」

急に口ごもるアリス。それを、リムーブは見逃さなかった。

「だいたいさー、何その年上に対する態度。だめだね、そんなじゃ王都なんて夢のまた夢だね!」

「うっ……ううー……」

「はっはっは、王都までの道のりは、この様子じゃまだまだ遠いなー」

「くううー……」

ここぞとばかりに攻めるリムーブ。

日ごろの恨み（主に暴言失言）を晴らすチャンスだった。

ちなみに、アリスの夢は将来王都に移り住むことである。こんな田舎に住むアリスにとっては、王都はまさに夢にみるような羨望の街なのだった。

しかし、彼女の性格が性格だ。

普段から『今のままじゃ王都なんて行けないぞ』なんてことを言われているため、非常にそのことを気にしている。

言うなれば、それが彼女の弱点だった。

「わ、私はともかくリムーブさんはどうなんですか? まだお若い

のに、いつまでこんな田舎にいるつもりなんですか」

無理やりな話題の切り替えに笑いそうになったが、これ以上いじめるのも可哀想になったので、リムーブは話をあわせることにした。
「別に、村から出るつもりもないなー俺は。てか、別にいたっていいだろ？」

「いえ、そうではなくてですね」

「じゃあなんだよ」

「いやだって、珍しいじゃないですか。リムーブさんくらいの歳だったら、皆都市部の方に出て行きますよ」

「あーまあなあ」

最近の若者の都市部進出。それに連なって浮き彫りになってくる過疎化。

それは、どこの村でも例外なく問題になっている。

もちろん、この村も。

「こんなところで隠居みたいな生活送ってないで、王都あたりでも言ってみてはどうです？リムーブさん、剣の腕は立つんですし。それなりに」

「それなりには余計だ！……ってもなあ、どうもこの生活俺の性にあってんだよなあ。なんというか、俺はこの抜けきったような平和が大好きだ」

気の抜けた台詞を言うと、リムーブは残っていた最後のパンを口の中にほうりこんだ。

「だからさ、俺は村から出る気はないよ」

そんなリムーブの言葉を聞いて、アリスは呆れた様子で、

「本当、欲のない人間ですねえ」
と言った。

所変わって村の近くにある森の中。

鬱蒼うつそうと生い茂る木々を切り開いて出来た小さな道を、リムーブは歩いていた。

背中には彼の身長のはありそうな樽を背負っている。

「あゝあ……疲れる……」

気だるげな表情を浮かべながらリムーブは呟いた。その割りに、汗はまったく掻いていない。

とある田舎の村から往復約一時間のところにある『魔狼の森』と呼ばれる森。

そこに昔からある井戸まで水を汲みに行くことが最近のリムーブの日課だった。

「ハア……空気がおいしい」

暢気なことを言っているリムーブだが、この森はそんなに優しいところではない。

名前のとおり、此処には『魔狼』と恐れられている魔物が棲みついている。

もし何も知らない人間が魔狼たちの住処に近づいてしまったら、おそらくその人間は一分もかからない内に骨も残らない状態にされてしまうだろう。

今はまだ朝方なので魔狼たちは出てこないため比較的穏やかだが、夜になればこの森は完全な魔境と化す。

したがって、朝の早い安全な時にいそいそと水を汲みに行かなければならないのだ。

ちなみに、水を汲みに行くのは宿屋の女将さんのためである（なんでも料理には井戸の水が一番だとか）。住んでいる小屋代の家賃と言ってしまえばそれまでだが、リムーブ自身、この女将さんには

恩を感じているので、こういう危険な作業は進んで引き受けているものだった。

さすがにアリスにやらせるわけにもいかないし。

「――アリスかあ……」

ふと、あのおてんば娘を思い出す。

日ごろの言動がスサマジイ彼女だが、最近なんと言うか、変だ、と思えることがあったりする。

たとえば、妙に女らしくなったりとか。

見た目、というより内面のほうが、だ。

アリスは年齢とは裏腹に成長の乏しい女の子だ（まあこんなことを本人に言えば、ボコボコにされるだろうが）。しかし、どうにもそのことが気になるらしく、毎日二リットルは牛乳を飲むようにしているらしい。

そのせいでバターやチーズなどの乳製品が減ってきている。いい迷惑だ。

他にも、仕草にも女らしさが垣間見えることが多々あったりする。服装にも気を使ったり、美容にも力を入れたり、昔はパンツがたまたま見えても気にも留めなかった彼女が、最近では見えてるのを指摘しただけで殴ってきたり。

年齢を考慮すれば当然の成長だが、どうも不自然に思えてしまう。あと、時たま不可解な行動をとったりする。

なにやらもじもじしたり、急に照れたり、体を寄せてきたり、言動がスサマジクなってきたのも最近だ。

「もしかして……」

リムーブは思う。

もしかしてアリスは、無理をしているんじゃないのだろうか？
将来的に王都に行きたいとしている彼女が、頑張って自分を変えようとしている節がある。でも無理やり自分を変えようなんて、無

理にもほどがある。

そんなこと、どうでもいいのに。

朝ではあんなことを言ったが、今でもアリスは十分立派だ。

言いたいことははっきり言えるし、宿屋の仕事だって文句を言いながらも手伝ってるし、なにより、他人のことをちゃんと思いやる人間だ。

少なくとも——自分よりは立派だとリムーブは思う。

こんな自分より。

彼女の方が、何倍も立派だ。

「ったく……世話の焼ける……」

そう言うリムーブは、自然と笑みがこぼれていた。

結局、彼も自分の妹みたいなアリスの世話を焼きたがるような人間、だということだ。

——ただ、その『妹扱い』がアリスにとって嫌だったことに気づくのは、まだ先になるのかもしれない。

#####

森に入って約十分。

ようやく目的地に着いたリムーブは、そこで大きく深呼吸した。

「くああ……空気が上手い……幸せだ」

たどり着いたそこは、大きな空間だった。

おそらくは大昔の村人がこの空間を作ったのだろう。何年何十年何百年たっても此処が崩れることがないというのは、何かしらの『魔法』が働いているのかもしれない。

そこは円形切り開かれていて、広場と呼べるくらいの大きさだっ

た。ついでその周りに生える木々がその空間の中央に向かってしなだれているので、上はまるでドーム型の天井のようになっていた。そしてその中央に、ぼつんと井戸が存在していた。寂しげに、しかし確かな存在感を持って、それは在る。

いつ来ても神秘的な場所だな、とリムーブは思った。生い茂る木々から漏れてくる陽光や、聞こえてくる森のさざなみの音、それを引き立てるような周りの静けさが、此处にある神秘性を引き立てているのかも知れない。

だが、この内側に染み渡ってくるようなこの感覚は一体なんなのだろう？

視覚や聴覚ではなく——もっと自分の内の内、さらに深遠まで伝わってくるこの言い知れぬ感覚。

これも、やはり『魔法』のような『奇蹟の力』がかかわっているのかも知れない。

「とと……さっさと仕事は済まさなきゃな」

いつまでも突っ立っているわけにもいかないな。

そう思い、リムーブは井戸の方へ近づいていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4540/>

シニガミアルマ

2010年10月10日07時33分発行